

# 第1回 大阪圏生活支援ロボット産業拠点の形成に係る推進協議会 (議事要旨)

日時：平成17年2月22日(火)  
14:00～16:00  
場所：リーガロイヤルNCB「淀の間」

## 1 開会

## 2 挨拶

内閣官房都市再生本部事務局次長及び関西次世代ロボット推進会議議長(関西経済連合会会長)[来賓]より挨拶。

## 3 委員紹介、資料確認

## 4 協議会の設置及び協議会の進め方の了承

協議会の設置要綱(案)及び協議会の進め方(案)を説明し、了承。

## 5 地元の取り組み状況の報告

関西次世代ロボット推進会議及び地元自治体(大阪府、兵庫県、大阪市、神戸市、大阪商工会議所)より、これまでの取り組みを紹介。

## 6 実施計画書(骨子素案)に関する審議

関西次世代ロボット推進会議から、実施計画書(骨子素案)について説明。その後、実施計画書(骨子素案)に対する意見を中心に、自らの施策との関連も含めて各委員から発言。主な発言は、以下のとおり。

各省庁が有するロボット技術の研究開発ポテンシャルを効果的に結集し、さまざまな応用分野に共通したプラットフォームとなる技術の確立を図る。今後、総合科学技術会議の下に連携推進ワーキンググループを設け、一体的な推進を図る。

ロボットとネットワークを融合させたネットワークロボットとして、ATR等に委託し、人にやさしいコミュニケーション技術等を研究開発。生活支援ロボットという中でも重要な位置付けになり、こうした研究成果も是非、地元の活動の中に組み入れていただき、有機的な効果が出るように取り組んでいただきたい。

地域の研究開発資源を活用した取り組みを支援して参りたい。特に、関西学研都市では知的クラスター創成事業「けいはんなヒューマンエルキューブクラスター」として生活支援ロボットの開発等に取り組んでいる。また、科学技術人材養成の取り組みや各種の競争的資金制度などの積極的な活用を期待する。

大幅な省力生産技術の確立、栽培履歴情報の蓄積など高度な生産管理、農産物トレーサビリティシステムの支援機能などについて注目し、ロボット技術に関して研究開発等を推進。ロボット技術を活用した作業労力の軽減や、食の安全・安心に対して支援して行きたい。

来年度は、介護・リハビリ分野でのロボットの实用化に向けた「人間支援型ロボット実用化プロジェクト」と、「次世代ロボット共通基盤開発プロジェクト」として要素技術の標準化に取り組む予定。近畿地域でも、ものづくり産業クラスター計画のテーマとして取り組んでいる。

来年度、「パイロット・モデル都市としての関西学研都市におけるロボット開発支援調

査」を行う予定。都市の環境や生活に関わる課題、防犯や交通安全などについてロボット技術がどう支援できるかを追及。NICT や ATR と連携を図りつつ、実証実験につなげたい。ロボット特区の準備も地元で進めている。

住宅や建築物でこういった対応があわせて必要なのか、バリアフリーなど、ロボットがきちんと動くために必要な条件を勉強したい。来年度、先導的技術を用いた住宅供給の促進のための技術開発について支援する予定。

地元が主体的に取り組んでいく姿勢が必要。その上で、様々なプロジェクトを統括する推進体制、熱心なリーダー、ユーザーニーズを的確に把握するための事前評価や第三者機関などによる事後評価が重要。本プロジェクトの終了時点でどのようなロボットが出来上がっているか、スケジュールと目標、評価指標を明確化すべき。

社会実証実験について外部評価的な仕組みを組み込みたい。また、協働プラットフォームを具体化して実質的な体制を作ることが必要。

京都の知的集積を活用した産学連携による展開の方向について検討中。特に、新たな重点産業分野として、「ウェルネス産業」と「有害鳥獣対策」の分野でのロボットの活用や実用化を目指したい。

中小企業からの様々なアイデアからビジネスにつながる取り組みに期待。各種の施策を投入して支援していきたい。

ロボットは様々な技術が集約された RT であることを実証実験を通して市民にみせていくことが必要。協働プラットフォームの果たす役割は非常に重要だが、多くを盛り込むと中途半端になるため、基本的な欠かせない機能は何かを、ロボットラボラトリーの経験をいかして良く考え、プラットフォームづくりを進めていきたい。

京都ではロボット学会の吉川会長を求心力として学のネットワーク化が進行中。ロボット開発の要素技術をもつ企業をうまくつなぎ合わせて、産学連携を進めていきたい。

すぐに実用化・製品化につながるようなものは少ないという現状を踏まえ、要素技術や基礎となる研究をサポートしていきたい。また、研究開発成果がどのような製品に応用されるかを具体化することが産業化を促進させると考え、この部分の取組みも進めたい。研究そのものについて競争的な環境は重要。政府全体としての指針、最も重要な所は何かというガイドラインを示し、公的な研究の重点目標を明確に調整できるという体制づくりが望ましい。ロボットは手探り段階なので、意味のある分野はどこなのか官民のコンセンサスが必要。

ロボットは「対応する分野が多い」「様々な技術の集合体」という意味で総合技術である。その推進には、産学の連携、企業間の連携、府省間の連携の3つが重要であり、今後、コーディネーターを核に、府省と産業界が連携してガイドラインを設定し、クリティカルテクノロジー的なものにしていきたい。

PD、PO 及び PL を専門として設置するとなると、フルタイムではお金もかかる。また、産業化に向けては様々な局面があり、都度主役が変わる。

内発的な研究の意欲や他との競争に刺激を受けながら、協働できる場所は共通のプラットフォームで協働するというフレキシビリティの富んだあり方が必要。

## 7 その他

事務局より、実施計画書の検討については、当協議会の下に設置した検討会において進め、次回の協議会は約半年後を目処に開催すること等を説明。

## 8 閉会

以上